

三論学綱要書の流通を通してみた 百済仏教学の日本仏教への影響

崔 鈇 植

〈目次〉

- 一 はじめに
- 二 奈良時代の三論学綱要書
- 三 平安時代に流通された三論学綱要書
- 四 日本古代三論学に及ぼした百済仏教の影響
- 五 おわりに

〈要約〉

日本の仏教は百済を通して伝来されたのであるが、日本古代仏教界に及ぼした百済仏教学の影響は具体的に知られていないのである。ところで、最近、百済で撰述されたものと知られる『大乘四論玄義記』が日本古代三論学の発展に大きな影響を及ぼしたことが確認される。

奈良時代に流通された主要三論学綱要書としては、慧均の『大乘

四論玄義記』と元暎の『三論玄義（宗要）』が確認される。この二つの文献は、七四〇年代から七六〇年代まで頻繁に筆写されて広く流通されている。反面、後代日本仏教界において三論学の基本綱要書として広く読まれていた吉蔵の『三論玄義』と『大乘玄論』などは流通された痕跡がみられていないのである。『二諦義』と『三論略章』など、吉蔵のほかの著述も七六〇年代以降にはじめて流通されている。

八世紀末以降には以前とは違い、吉蔵をはじめとする中国僧侶たちの三論学綱要書が多数流通されている。ところで、この時、新たに流通された文献の中にはそのアイデンティティーが不明なものが少なくない。僧肇や法朗のような三論学祖師たちの名前に仮託された文献が少なくなく、吉蔵の著述と伝わるものの中にも吉蔵本人の著述でない後代に編集されたものがある。このような様々な文献の中でも吉蔵の著述と知られる『三論玄義』と『大乘玄論』は奈良

時代の代表的文献である『大乘四論玄義記』と『三論玄義（宗要）』に代わって、代表的三論学綱要書として流通されたのである。

『大乘玄論』は、既存の『大乘四論玄義記』をモデルにしなが、これを簡略に整理した文献にして、吉藏の著述に基づいて日本で新たに編集されたものと考えられる。三巻八篇で構成される『大乘玄論』は、二十三篇の主題を十二巻に収録する『大乘四論玄義記』に比べ活用するのに便利であつたろう。『三論玄義』は、本来、三論に対する吉藏の注釈書中、一部を再整理したもので、特に三論学論書のほかの経論に対する優越性を強調するところに特徴がある。これは諸経論の思想的違いを会通する和諍を重視していた元暁の『三論宗要』とは異なる性格である。奈良時代後期以降、日本仏教界は学派間の競争と宗派意識が強くなつた結果、このような文献が登場するようになったと考えられる。

このように日本の三論学（派）は、初期には韓半島（朝鮮半島）で撰述された『大乘四論玄義記』と『三論宗要』を土台にして形成されたのであり、以降、宗派として発展する段階には、吉藏の著述を土台に日本で再編集された『大乘玄論』と『三論玄義』を土台に独自のな性格を整えていった。ところで『大乘玄論』は、体制のみならず、内容においても『大乘四論玄義記』をモデルにして、これを變形させたものであつた。このような点において『大乘四論玄義記』は、日本古代三論学（派）の形成と発展の土台になった最も重要な文献であることができる。そして『大乘四論玄義記』の

このような位相を考慮する時、既存の日本三論学（派）の形成過程を改めて検討する必要があると考えられる。

日本の三論学は高句麗僧侶と中国に留学した日本僧侶によつて伝えられたと知られている。しかし『大乘四論玄義記』が奈良時代に頻繁に筆写され、さらに平安時代までも持続的に影響を及ぼした事実を考慮する時、このような認識は歴史的事実を正しく反映したもとのとは言い難いのである。『大乘四論玄義記』が撰述された百済の三論学が日本三論学の形成と発展により大きな影響を及ぼしたとみるべきであらう。

一 はじめに

百済は日本の仏教受容と初期仏教の形成に大きな影響を及ぼした⁽¹⁾ことと知られている。六世紀中葉、外交的努力を通して日本が公式的に仏教を受容するようになったのであり、仏教受容が決定された六世紀末以降には、数回にわたる僧侶及び技術者の派遣を通して仏教思想と文化が定着できるように助けてあげたのである⁽²⁾。これは高句麗及び新羅との関係が悪化された状況において日本との政治、経済的協力を強化して難局を打開しようとした政策の所産であると評価することができる⁽³⁾。仏教が定着された七世紀以降にも百済と日本の仏教界は緊密に交流したのであり、百済が滅亡した以降にも、百済出身の僧侶たちが日本の仏教界において活発に活動したのである。

また、日本初期仏教界において活動した人たちの中にも百済系移民とその子孫たちの活動が目立っているのである。⁽⁴⁾

このように百済仏教が日本初期仏教の形成と発展に重要な影響を及ぼしたのであるが、日本初期仏教に影響を与えた百済仏教の具体的な様子は確認し易くないのである。日本仏教が発展するにつれて初期の様子が相当失われたばかりでなく、百済仏教自体も関連資料がほとんど湮滅され、その具体的様子を把握し難いからである。幸いに寺刹建築と仏教彫刻の側面においては現存する寺院遺跡と古代仏像を通して百済仏教と日本古代仏教に対する比較研究が進行されてきたのであり、これを土台に百済仏教が日本古代仏教に及ぼした影響に対する基礎的理解が可能になったのである。⁽⁵⁾しかし、関連資料が皆無である仏教思想と仏教学分野においてはこれに対する理解がほとんどなされていなかったのである。日本で活躍した百済出身僧侶たちが少なからず確認されるが、彼らの思想と教学に関する資料はほとんど残っていないのであり、したがって百済の仏教思想と仏教学の影響も彼らが属していたとする学派の思想に対する理解程度にとどまっている。幸いに最近、日本仏教界に伝えられる百済出身僧侶たちの「散逸した」著述の逸文を蒐集してその思想的特性を検討する研究が提示されたのであるが、⁽⁶⁾日本仏教に及ぼした百済仏教の具体的様子を示す貴重な成果であるということができた。ただ、逸文資料が非常に断片的であるため、百済仏教の具体的様子とそれが日本仏教界に及ぼした影響に対する具体的理解には限界が

少なくない。今後、さらに進展された資料発掘と思想内容に対する検討が要望される。

このような点において、最近、百済で撰述された文献として確認された『大乘四論玄義記』⁽⁷⁾の日本仏教界への影響は特に注目される必要がある。たとい完本でなくとも全体の半分を超える七卷分量の内容が伝えられているため、思想内容を具体的に知ることができるのみならず、百済仏教の中でも日本仏教界に最も大きな影響を及ぼしたと考えられる三論学派の文献であるからである。日本仏教界の伝承によると、百済から日本に渡ってきて活躍した僧侶たちの絶対多数は三論学者と現れているが、彼らの思想的特性と日本仏教界に及ぼした思想的影响については具体的に語られていないのである。日本三論学の形成と発展においても百済出身三論学者たちの影響はそれほど強調されていないのである。むしろ、中国留学僧と高句麗出身僧侶たちがより大きな影響を及ぼしたことと語られている。しかし、日本古代の仏教資料を検討すると、日本初期三論学において『大乘四論玄義記』は非常に重要な位相を持っていたことと現れているのであり、これは百済の三論学が日本古代三論学の形成と発展に重要な役割を果たしたことを示すものであるということが可能である。この論文では日本古代仏教界における三論学綱要書の性格と流通状況に対する検討を通して『大乘四論玄義記』の位相を探ってみて、これを土台に日本古代仏教界に及ぼした百済三論学の影響について考えてみようとする。

二 奈良時代の三論学綱要書

三論学(宗)は日本仏教界において最も先に成立された学派と伝えられている。伝承によると、推古天皇の時に日本にやってきた高句麗出身の慧灌と百濟出身の觀勒によつてはじめて伝えられたとし、奈良時代初期にすでに学派としての体制を整えたとする。奈良時代中期以降には、法相宗と共に最も有力な学派として仏教界を主導していたのである。

日本の三論学ははじめて傳來されて以来、中国三論教学の完成者である吉蔵の教学に依拠したと伝えられている。実際に奈良時代以来、多くの吉蔵の著述が日本仏教界に伝えられたのであり、これらの文献を土台にして日本の三論学が発展したのである。しかし、奈良時代の主要三論学文献の中には吉蔵以外の人物の著述も少なからずみられている。特に經典と論書の注釈書でない三論学の基本内容を整理する綱要書中には、吉蔵の著述よりも吉蔵以外の人物による著述がより多く流通されている様子が現れている。これは奈良時代の三論学に対する理解が吉蔵のみならず、多様な人物たちの著述と思想に依拠していることを示すものであるということができ

る。奈良時代に流通された三論学文献を総合的に整理した目録はないが、奈良時代の古文書にみられる写経記録及び仏典目録などを通して

て当時流通された文献に対する概略的な理解は可能である。奈良時代の古文書⁸⁾においては、吉蔵の著述である『華嚴(經)疏』『勝鬘經疏』(『勝鬘宝窟』)『金剛般若經義疏』『仁王經疏』『無量義經疏』『法華(經)義疏』『法華玄論』『法華經遊意』『法華(經)統略』『涅槃經疏』『中論(義)疏』『百論疏』『十二門論疏』『法花論疏』『二諦義』などをはじめとして、元康の『中論疏』『三論疏』『肇論疏』、元暁の『三論宗要』と『三論玄義』、慧均の『大乘四論玄義記』(『三論広章』)、そして撰者未詳の『中論記』『中観論記』『中観論宗要』『中論遊意抄略』『三論略章』など、二十余种の文献が確認されている。全体の文献中、半分以上が吉蔵の著述であることから見て、当時三論学に吉蔵の影響は絶対的であつたと考えられる。しかし、注目されることは、經典と論書の注釈書でない三論学綱要書の中には吉蔵の著述がそれほどみられないという点である。

右の文献の中で三論学綱要書とみることができるものは、吉蔵の『二諦義』、元暁の『三論玄義』と『三論宗要』、慧均の『大乘四論玄義記』(『三論広章』)、そして撰者未詳の『三論略章』など四種である。これらの文献の性格と具体的写経状況について探ってみることにしよう。

三論学綱要書中、最も先に写経の事実が記録された文献は吉蔵の『二諦義』である。この文献は三論学の基本概念の一つである二諦、すなわち俗諦(世諦)と真諦(第一義諦)という二つの真理の關係について論じたものにして、二諦を主題にして三論学の基本的

立場を体系的に整理している。⁽¹⁰⁾ 奈良時代の古文書の中には、天平十二年(七四二)三月に作成された仏典目録にはじめてこの文献の存在が確認されている。⁽¹¹⁾ その後、天平宝字七年(七六三)と、神護景雲二年(七六八)の記録にもこの文献の筆写の事実がみられて⁽¹²⁾る。奈良時代の古文書において三回確認されているのである。ところで、七四二年の仏典目録と七六〇年代の写経関連記録にみられるこの文献の名称と巻数には違いがある。前者は『二諦義』一卷であるのに反して、後者は『二諦章』三巻になっている。「義」と「章」は書名において互いに互換されているため、大して問題にならないが、巻数の違いは単純(な問題)ではない。一卷と三巻という分量の違いを考慮する時、二つの本を同じものとみることが難しい。現在伝わっている吉蔵の著述『二諦義』は三巻本であるため、七六〇年代に筆写された文献は吉蔵の『二諦義』とみることができ、七四二年の目録にみられる『二諦義』は吉蔵の『二諦義』とは異なる文献とみるべきであろう。二諦は三論学の基本概念中の一つにして、三論学の基本内容を説明する時、優先的に説明されるべき内容であった。現存する三論学綱要書中にも「二諦義」という篇目を含んでいる文献が少なくない。⁽¹³⁾ 七四二年の初出現以降、二十年が経ってから再び姿が現れることも二つの文献がそれぞれ異なる文献である可能性を示すものであるとすることができる。吉蔵の『二諦義』に先行して同一タイトル〔同名異書〕の著述が流通されたと考えられるが、この本の著者や具体的性格については知り難い。⁽¹⁴⁾

『二諦義』の次に古文書資料にみられる三論学綱要書は慧均が撰述した『大乘四論玄義記』(『三論広章』)である。この文献は六世紀末から七世紀初めの時期に百済地域で撰述された文献にして、⁽¹⁵⁾ 本来、十二卷二十三篇から成っていたのである。現在九卷十一篇(一部欠落)が伝えられているのであり、⁽¹⁶⁾ 伝わらない篇目の一部の内容がほかの文献に引用され確認されている。⁽¹⁷⁾ 三論学に関する多様な主題を総合的に整理した綱要書にして、三論学の全体的様子を示す文献であることができる。⁽¹⁸⁾

奈良時代の古文書においてこの文献がはじめてみられるのは天平十二年(七四二)である。この年の七月に写経所で作成した筆写すべき文献の目録に『均章』(十二巻)という書名がみられている。⁽¹⁹⁾ 『均章』は撰者の名前を取った『慧均師章』の略称にして、後代にもしばしば使用されている。以降、この文献は頻繁に筆写されている。天平十五年(七四三)の筆写を終えた仏典文献目録中に『大乘四論玄義記』(二帙十二巻)がみられ、⁽²⁰⁾ 天平十六年(七四四)に写経所で筆写した文献目録中にも『大乘四論玄義記』(十二巻)がみられている。⁽²¹⁾ また、天平十七年(七四五)と、十八年(七四六)、⁽²²⁾ 十九年(七四七)、⁽²³⁾ 天平勝宝五年(七五三)、⁽²⁴⁾ 神護景雲二年(七六八)の写経文献目録にも『均章』或いは『大乘四論玄義記』⁽²⁵⁾ という書名として現れている。一方、神護景雲二年二月に奉写一切経司で蒐集した文献目録中にみられる『三論広章』(一部十二巻)⁽²⁶⁾ も『大乘四論玄義記』と同じ文献である。同年十一月に奉写一切経

司から造東大寺司に送った文献目録の中に「三論広章十二卷（均正撰）」と記録している。⁽²⁸⁾

このように『大乘四論玄義記』は、七四二年から七六八年の間の古文書に計九回、筆写の対象、或いは筆写された文献目録に現れている。かなり頻繁に筆写されたことを知り得る。

奈良時代の古文書資料において『大乘四論玄義記』の次にみられる三論学綱要書は元暁の『三論宗要』と『三論玄義』である。『三論宗要』は現在伝わっていないのであるが、三論学の基本文献である『中（観）論』『百論』『十二門論』の思想的要点を整理した三論学の綱要書と考えられている⁽²⁹⁾。奈良時代の古文書には、天平勝宝二年（七五〇）⁽³⁰⁾と、四年（七五二）⁽³¹⁾、六年（七五四）⁽³²⁾に『三論宗要』（一卷）を筆写した事実が記録されている。一方、天平勝宝五年（七五三）⁽³³⁾と、天平宝字七年（七六三）⁽³⁴⁾、八年（七六四）⁽³⁵⁾、神護景雲元年（七六七）⁽³⁶⁾には似たようなタイトルの『三論宗要記』が筆写された事実が記録されているが、この本は元暁の『三論宗要』と同じ本であると把握される。本のタイトルが似ているばかりでなく、筆写に使用された紙の分量も十六張と一致するからである。この場合『三論宗要』は七五二年から七六七年の間に計七回筆写されたこととみることができる。

一方、奈良時代の古文書には、元暁の三論学綱要書として『三論玄義』もみられている。神護景雲二年（七六八）二月に奉写一切経司から造東大寺司に送った仏典目録に元暁の『三論玄義』がみられ

ている。⁽³⁷⁾この資料においては、この元暁の『三論玄義』がほかの二十九種の文献と共に、日本に華嚴学をはじめて伝えた審詳が持っていた仏典中に含まれていたことを明記している。⁽³⁸⁾一方、天平二十年（七四八）⁽³⁹⁾、天平勝宝二年（七五〇）⁽⁴⁰⁾、四年（七五二）⁽⁴¹⁾の文書にも『三論玄義』がみられているが、この本もなお、元暁が撰述した『三論玄義』を指すものと把握される。既存（の説で）は、この本を現在伝えられている吉蔵の同名の本として理解したのであるが⁽⁴²⁾、これらの資料にみられる『三論玄義』もなお、先の神護景雲二年二月の文書にみられる『三論玄義』と同様に、審詳が所蔵していた文献中に入っていたものと理解されるため、元暁の著述とみるのが妥当であろう。すなわち、これらの文書はすべて写経などのために仏典の貸出を要請する文書として、収録される文献の内容と順序がほぼ同じように現れているが⁽⁴³⁾、該当文献のほとんど、特に『三論玄義』の前後にある数十余種の文献はすべて審詳が所蔵していた文献目録においてそのまま確認されている。⁽⁴⁴⁾このような前後の事情からみると、これらの文書に収録される『三論玄義』は、審詳が所蔵していた本にして、元暁の著述とみるのが妥当であろう。一方、天平十八年（七四六）四月の資料にも『三論玄義』の筆写と関連される事実が記録されているが⁽⁴⁵⁾、ほかの古文書資料にみられる『三論玄義』がすべて元暁の著述であるという点から、この本も元暁の著述を指すものと考えられる。これらの資料を参照すると、元暁の『三論玄義』は七四六年から七六八年まで五回ほど筆写されたこととみられる。

このように奈良時代の古文書には、元暁が撰述した三論学綱要書として『三論宗要』と『三論玄義』の二種の文献がみられている。

ところで、この二種の文献は、実際には同一文献であったのではないかと考えられる。宗要や玄義というタイトルが似たような意味を持つているのみならず、古文書及び仏典目録などに、二つの文献が同時に現れる事例がみられないからである。二つの文献が同じような時期に筆写、流通されたのであるから、それぞれ異なる文献であれば、資料に同時に現れるべきであるが、そのような事例がないことからみて、二つの文献は同一文献の異称とみるのが妥当であろう。実際に二つの文献の分量も同程度に現れている。天平十八年の『三論玄義』関連資料は、写経のために紙を準備する装潢の作業量を記録した文書であるが、『三論玄義』の筆写のために二十張の紙を準備したと記録されている。ところで、奈良時代の写経作業においては、筆写上の誤謬に備え(ると同時に)、本の表紙用途に使用するために、一定程度の余分の紙を事前に準備したことを考慮すれば、実際の分量が十六張であった『三論(原文は華嚴)宗要』と、分量がほぼ同じであったとみることができると。このように元暁の『三論宗要』と『三論玄義』が同一文献であれば、この一巻本の元暁の三論学綱要書は、七四六年から七六八年の間に十二回ほど筆写されたことになるであろう。

奈良時代の古文書に現れる三論学綱要書中、写経記録が最も遅いものは『三論略章』である。この文献の筆写記録は神護景雲二年

(七六八)の文書にみられている。この年の十一月十日に奉写一切経所「司」から造東大寺司に写経の勘経のために要請した文献目録中に『三論広章』、すなわち『大乘四論玄義記』十二巻と共に『三論略章』三巻がみられている。これに対して造東大寺司では、同月二十五日に一次的に七種の文献を奉写一切経司に送ったのであるが、その中にこの『三論略章』が入っている。一方、奉写一切経司は十二月二日に再び造東大寺司に文献を要請しているが、その中に『大乘四論玄義記』十二巻、すなわち『三論広章』が入っている。そして、これに対して造東大寺司は、同月二十日に『大乘四論玄義記』十二巻を含む様々な文献を奉写一切経司に送り届けている。これにより、奉写一切経司は勘経に必要な『三論広章』と『三論略章』をすべて蒐集することができたのである。

『三論略章』は、このように七六八年の写経関連資料にはじめてみられるが、撰者や『三論広章』との関係などについてはなら言及がない。ただ、この本が『三論広章』と同様に、図書館に所蔵されていた本であるという事実だけが言及されている。ところで、この『三論略章』のまたのタイトルは、『三論広章』と同様に、『無依無得(大乘四論玄義記)』であったこととみられる。七六八年十二月二日に奉写一切経司から造東大寺司に送った文書には、十二巻本と三巻本の『無依無得大乘四論玄義記』二種がみられているが、十一月十日に送った文書と比較してみると、各々『三論広章』と『三論略章』を指すものと把握される。神護景雲二年二月三日に奉写一

切経司から造東大寺司に送った文書にも、凶書寮に所蔵される『三論広章』十二巻と共に『無依無得大乘四論玄義記』三巻を要請しているが、情況からみて、後者は『三論略章』を指すものと考えられる。

このように七六八年の文書にはじめてみられる『三論略章』は、『三論(原文は大乘)広章』と同様に、『無依無得』大乘四論玄義記』という書名を持つていたのである。ところで、このような書名からみると、この本は後代の仏典目録にみられる浄秀の『三論略章』である可能性が高い⁽⁵³⁾。平安時代前期に筆写された法金剛院蔵『大小乗経律論疏記目録』と十二世紀に撰述された『三論宗経論章疏目録』には、各々浄秀が撰述した『三論略章』三巻と『四論玄義』三巻⁽⁵⁴⁾がみられているが、撰者と巻数が一致してタイトルが似ていることからみて、二つの本は同一文献であると考えられる⁽⁵⁵⁾。すなわち、浄秀が撰述した三巻本の三論学網要書は『三論略章』或いは『四論玄義』と呼ばれたのである。ところで、このように『三論略章』と『四論玄義』という書名を持つ三巻本の三論学網要書は、七六八年の資料にみられる『三論略章』と同一の性格を持つのである。このような点において七六八年の資料(にみられる)『三論略章』は、後代の文献目録にみられる浄秀の『三論略章』と同一の本にして、『無依無得』大乘四論玄義(記)』という別称を持つていたと推定される。

浄秀の『三論略章』は、現在伝えられていないため、その内容を知ることができないが、名称上の類似性からみると、『三論広章』

すなわち、慧均の『大乘四論玄義記』と似たような性格の本であったと考えられる。分量が多い『三論広章』を要約した縮約本か、できなかったら、慧均の本を模った似たような形式の本であるとみることができると、奉写一切経司で勘経のために二つの本がすべて必要であったことをみれば、前者よりは後者の可能性が高い。浄秀の出身地域や活動時期は知り得ないが、彼の『三論略章』が『三論広章』より遅れて現れることからみて、慧均より後代の人物にして、慧均の影響を受けた地域、すなわち百済や新羅、或いは日本の出身であると考えられる。

これまでみてきたように、奈良時代の資料に筆写及び流通の様子がみられる三論学網要書は、吉蔵の『二諦義』と、慧均の『大乘四論玄義記』、元暁の『三論玄義』(『三論宗要』)、浄秀の『三論略章』、そして撰者未詳の『二諦義』などである。この中、『大乘四論玄義記』と『三論玄義』は、七四〇年代以降七六〇年代まで頻繁に筆写されて広く流通された反面、吉蔵の『二諦義』と浄秀の『三論略章』は、七六〇年代以降にはじめて資料に姿が現れている。そして撰者未詳の『二諦義』は、七四二年の目録に一度みられた後、以降には現れていないのである。これにより、奈良時代の仏教界における代表的な三論学網要書は、慧均の『大乘四論玄義記』と元暁の『三論玄義』であったということができるのである。

一方、奈良時代の古文書資料には、後代日本仏教界において三論学の基本網要書として広く読まれた吉蔵の『三論玄義』と『大乘玄

論』などがみられていない点が注目される。この二つの文献は中世

られている。

以降、日本三論学の最も基本的文献として認められてきたのであり、現在までも三論学に対する理解は、この二つの文献に基づいている。しかし、奈良時代の資料には、これらの文献の姿は全く確認されていないのである。奈良時代に撰述された三論学文献である智光（七〇九—七八〇頃）の『浄名玄論略述』と『般若心経述義』などにも、これらの文献は全く言及されていないのである。もちろん古文書資料が当時流通されたすべての文献を網羅しているとは言えないが、写経担当機関において当時の主要仏典を総合的に整理した目録にも全くみられないのであり、同時代の日本僧侶の文献にも言及されていないことからみると、これらの文献が当時に広く流通されたとみることは難しい。果たしてこれらの文献がいつから日本仏教界において主要な文献として流通されるようになったかについては再検討する必要がある。

三 平安時代に流通された三論学綱要書

奈良時代に筆写、流通された痕跡がみられる三論学綱要書の数が四、五種に過ぎなかったことは違い、平安時代には遥かに多様な三論学綱要書が確認されている。平安時代に編纂された（法金剛院蔵）『大小乗経律論疏記目録』⁽⁵⁹⁾、『三論宗章疏目録』⁽⁶⁰⁾、『三論宗経論章疏目録』⁽⁶¹⁾、『東域伝灯目録』⁽⁶²⁾などには、次のような三論学綱要書がみ

○（法金剛院蔵）『大小乗経律論疏記目録』

『均章』（十二卷四八〇紙）、『三論広章』（均正師、十二卷

六一〇紙）、『三論玄義』（四卷一六〇紙）、『三論略章』（吉蔵師、

三卷一三〇紙）、『三論略章』（浄秀師、三卷二二〇紙）、『山門玄』

（四卷一三〇紙）、『無依無得大乘四論玄義記』（十四卷七〇〇

紙）、『大乘玄義』（五卷一一〇紙）、『大乘玄義』（五卷二二〇紙）、

『四論玄義』（一卷三五紙）、『二諦義』（一卷三一紙）、『二諦章』

（三卷九九紙）、『二諦義』（六卷一八〇紙）、『八不義』（一卷

一〇紙）

○『三論宗章疏目録』

『四論玄義』（均正、十二卷）、『大乘玄論』五卷（吉蔵）、『三論

玄義』（元康、一卷）、『三論玄枢』（元康、二卷）、『三論玄記』

（元康、一卷）、『三論宗要』（元暎、一卷一七紙）、『三論遊意』

（碩法師、一卷）、『二諦章』（吉蔵、三卷）

○『三論宗経論章疏目録』

『二諦章』（吉蔵、三卷）、『大乘玄論』（吉蔵、五卷）、『八科章』

（吉蔵、一卷）、『大乘四論玄義』（慧均、十二卷）、『四論玄義』

（浄秀、三卷）、『三論宗要』（元暎、一卷）、『三論玄枢』（元康、

二卷)、『三論玄記』(元康、一卷)、『三論玄觀』(元康、一卷)、
 『(三論)遊意』(崇法師、一卷)

○『東域伝灯目録』

『三論遊意』(肇法師、一卷)、『三論遊意』(碩法師、一卷)、『三
 論遊意』(崇法師、一卷)、『三論玄義』(元康、一卷)、『三論玄
 枢』(元康、二卷)、『三論玄記』(元康、一卷)、『三論宗要』(元
 暁、一卷)、『三論略章』(吉蔵、三卷)、『三論広章』(均正師、
 十二卷)、『三論略章』(淨秀、三卷)、『三論玄義』(四卷)、『四
 論玄義』(禪[淨]秀法師)、『四論玄義記』(均正、十二卷)⁶⁵⁾、『二
 諦章』(吉蔵)、『八科章』(吉蔵)、『大乘玄論』(吉蔵、五卷)、
 『八不義』(一卷)、『八不義記』(一卷)

一方、平安時代初期の三論学者である安澄(七六三―八一四)の
 『中論疏記』⁶⁴⁾にも、次のような三論学綱要書が引用されている。

『大乘玄論』(『大乘玄(義)』、吉蔵)、『山門玄義』(法朗、
 五卷)、『均正玄義』(慧均)、『均正十二卷章』(慧均)、『二卷玄
 義』(吉蔵、一卷)、『三論略章』(吉蔵)、『遊意』(碩法師)

これらを撰述者別に整理すると次のようになる。

僧肇	『三論遊意』(一卷)
法朗	『山門玄(義)』(四卷或は五卷)
吉蔵	『二諦章』(三卷)、『(三論)玄義』(一卷)、『大乘玄論』(『 大乘玄(義)』、五卷)、『三論略章』(三卷)、『八科章』(一 卷)
慧均	『大乘四論玄義記』(『三論広章』、十二卷或は十四卷)
元暁	『三論宗要』(一卷)
元康	『三論玄枢』(二卷)、『三論玄記』(一卷)、『三論玄義』(一 卷)、『三論玄觀』(一卷)
碩法師	『三論遊意』(一卷)
崇法師	『三論遊意』(一卷)
淨秀	『三論略章』(『四論玄義』、三卷)
未詳	『三論玄義』(四卷)、『二諦義』(一卷)、『二諦義』(六卷)、 『八不義』(一卷)、『八不義記』(一卷)

奈良時代に比べて文献の種類が遥かに多くなったのであり、撰述
 者も多様になったことをみることができる。特に吉蔵の著述が多く
 なったのであり、そのほかにも、法朗、元康、碩法師など、中国三
 論学者たちの著述が多くなったのである。⁶⁶⁾中国との交流を通して新
 しい文献が多様に受容されたこととみることができる。これらの
 中、奈良時代の資料において確認された『二諦義』(一卷)、『二諦義』
 (吉蔵、三卷)、『大乘四論玄義記』(『三論広章』、慧均、十二卷)、

『三論宗要』（元暁、一卷）、『三論略章』（『四論玄義』、淨秀、三卷）以外の残りの文献について探ってみることにしよう。

まず、僧肇の『三論遊意』（一卷）は、後代に三論学者たちによって尊崇された僧肇の著述という点で注目される。しかし、この本は中国と韓国の仏教文献に全く現れていないばかりでなく、日本でも『東域伝灯目録』以前の仏典目録や文献にはみられていないのである。また、僧肇の伝記にも、この本に対する言及がみられていないのである。後代に彼の名前に仮託して撰述された文献である可能性が高い。現在伝わっていないのである。

法朗の『山門玄（義）』は、吉蔵の師匠にして、三論学の基本体系を完成した法朗の著述という点で重要な意味を持つが、僧肇の『三論遊意』と同様に、中国と韓国の仏教界には知られていない本である。法朗の弟子である吉蔵と慧均の著述にも全く言及されていないのである。後代に彼の名前に仮託して撰述された文献である可能性が高いと考えられる。⁶⁷

吉蔵の著述中、『三論玄義』（一卷）は、現在一卷本（原文は二巻本）として伝わっている『三論玄義』と同一の本であると把握される。安澄の『中論疏記』において吉蔵の『一卷玄義』と引用している内容が、現在の一巻本（同右）『三論玄義』においてそのまま見出されている。⁶⁸一方、この本は後代の珍海（一〇九二—一一五二）の著述においては『三論玄（義）』という書名と同時に『中論玄（義）』という書名でも引用されているが、『中論玄（義）』が本来の書名で

あったものと考えられている。⁶⁹実際に平安時代の仏典目録には、吉蔵の『三論玄（義）』は確認されないものであり、その代わりに『中（観）論玄（義）』（一卷）が吉蔵の著述と収録されている。本来『中論』の注釈書であったものが、後に三論学綱要書として流通されたのであろう。⁷⁰

吉蔵の『大乘玄論』は、仏典目録に記載された通り、五巻本として完全な形で伝わっている。⁷¹三論学の主要な主題に対して論じた、二諦義（巻一）、八不義（巻二）、仏性義、一乘義、涅槃義（巻三）、二智義（巻四）などと、三論学の立場から様々な經典と論書の位相を整理した、教迹義、論迹義（巻五）など、八つの篇で構成されている。独立された個別の篇を集めておいた義章形式の本にして『大乘四論玄義記』と似たような体裁である。『大乘四論玄義記』に比べてより核心的な主題だけを扱っているのであり、後ろの部分に経論全体を対象とする教迹義と論迹義を配置した点が特色である。『大乘四論玄義記』に比べてより整理されて進展された様子であるということが出来る。ところで、この本が実際に吉蔵本人が撰述したのかについては長い間論難があったのである。それはこの本の内容が吉蔵のほかの著述と重複される部分が少なくなかったからであった。⁷²特にそれまで伝えられなかった『大乘四論玄義記』八不義の発見により『大乘玄論』と『大乘四論玄義記』八不義の内容が互いに一致するという事実が知られるようになり、この本を吉蔵の撰述とみることが出来るかという疑問が提示された。⁷³しかし、現在までも

学界においては、本全体の内容からみると、吉蔵の著述とみること
に問題がないのであり、八不義の内容が『大乘四論玄義記』と重複
されることは、吉蔵死後の編纂過程において生じた問題とみること
ができるという見解が一般的に受け入れられている。⁽⁷⁶⁾しかし、最近
『大乘玄論』一乘義の内容に対する検討を通して吉蔵の著述とは認め
ない様子が見受けられるという見解も新たに提起されている。⁽⁷⁷⁾奈
良時代の資料にみられなかったこの文献は、八世紀後半に『大乘四
論玄義記』をモデルにしなから、より簡略に体系的に編纂されたも
のである可能性⁽⁷⁸⁾がある。

吉蔵の『三論略章』（三巻）は、現在同じ書名の『三論略章』（一
巻）⁽⁷⁹⁾が彼の著述と伝わっているが、巻数が異なるため、同じ本とは
見難いのである。ただ、安澄の『中論疏記』に引用されている吉蔵
の『三論略章』の内容が、現在伝えられる『三論略章』（一巻）の
内容と非常に類似するため、両者の間に一定の関連性があるものと
考えられる。『中論疏記』に引用される内容がより詳しいことから
みると、現在伝わる『三論略章』（一巻）は、本来の三巻本『三論
略章』を簡略に抄録したものと考えられる。⁽⁸⁰⁾ところで、現在伝えら
れる一巻本『三論略章』は、吉蔵のほかの著述『八科章』と同じ本
である可能性もある。十二世紀に活動した珍海は、当時吉蔵の著述
と流通されていた一巻本『三論略章』に対して、八科、すなわち八
つの項目で構成されているとしながら、前の時代の文献目録にみら
れる『八科章』と同じ本であろうと述べている。⁽⁸¹⁾この場合、本来の

三巻本『三論略章』を抄略したものが『八科章』であり、それが現
在伝えられる『三論略章』（一巻）であるということが⁽⁸²⁾できる。し
かし、三巻本『三論略章』とそれを抄略した『八科章』が、実際に
吉蔵の著述であるかについては疑問の余地がある。現在の『三論略
章』（一巻）の内容の中には、ほかの文献に提示されている吉蔵の
学説とは矛盾する内容がみられているからである。⁽⁸³⁾これに対して
は、三巻本を抄略する過程において発生した誤謬と解釈することも
できるが、本来の意図とは反対する内容で抄略した可能性は高くな
いと考えられる。本来の三巻本もなお、現在伝わる『三論略章』と
同様に、吉蔵のほかの著述とは矛盾する立場を取っていたのではな
いかと考えられる。すなわち、平安時代に吉蔵の著述として流通さ
れた『三論略章』（三巻）と、それを抄略した『八科章』は、実際
には吉蔵の著述ではなく、ただ彼の名前に仮託した文献であった可
能性が高い。

元康は唐の貞観年間に長安で活動した三論学者にして、三論、す
なわち『中論』『百論』『十二門論』などに対して注釈したのであり、
三論の要点を整理した『三論玄枢』を著した。⁽⁸⁴⁾奈良時代の資料にも
彼が撰述した三論の注釈書と、僧肇の『肇論』に対して注釈した『肇
論疏』⁽⁸⁵⁾がみられている。『三論玄枢』をはじめとする三論学綱要書
も比較的早い時期に日本に伝えられることができたと考えられる。
彼の著述の中では『肇論疏』（三巻）⁽⁸⁶⁾だけが伝えられているため、
彼が撰述した三論学綱要書の内容は知り得ない。

碩法師は中国や韓国の資料にはみられないが、日本仏教界では吉蔵の正統な弟子と知られていたのである。⁽⁹⁾ 奈良時代の資料にはみられないが、平安時代の文献目録には『中論疏』(十二巻)も記録されている。彼の『三論遊意(義)』は現在伝わっているものであり、⁽¹⁰⁾ 三論学派の基本的立場を簡略に整理している。ところで、この本の本論部分においては論書の名称を説明しながら『中観論』、すなわち『中論』の名称だけを説明しているが、このことからみると、この本は本来、三論全体に対して説明するものではなく、『中(観)論』に対して解説する本であった可能性がある。⁽¹¹⁾ この場合、この本は彼の『中論疏』の序論部分を別途に独立させたものであるかも知れない。

崇法師の『三論遊意』(一巻)の場合、撰者である崇法師がいかなる人物であるか知り得ず、本も伝えられないため、その性格を推定し難い。撰者未詳の『三論玄義』(四巻)もなお同様である。

『二諦義』(一巻)と『二諦義』(六巻)は、三論学の主要概念である二諦について論じたもので、分量からみると、吉蔵の『二諦義』(三巻)とは異なる本とみられる。二諦が三論学の核心理念であっただけに、これを主題とする書物が多数あったかも知れない。一巻本の場合、先にみた七四二年の仏典目録に言及されたものと同じ本であるかも知れないが、明確ではない。或いは現在の『大乘四論玄義記』や『大乘玄論』中の二諦義の部分を独立させた別行本であるかも知れない。

『八不義』(一巻)と『八不義記』(一巻)もなお、三論学の主要概念である八不について論じた著述であるが、実体は知り得ない。分量からみると、先の一巻本『二諦義』と同様に、『大乘四論玄義記』や『大乘玄論』中の八不義の部分の別行本である可能性もあると考えられる。

以上、平安時代に流通された三論学綱要書について探ってみた。この時期には、慧均と元暁の著述が主に流通された奈良時代とは大きく状況が異なっており、流通された文献の種類が遥かに多様になったのであり、また中国の三論学者たちの著述が多数であった。しかし、平安時代に新たに登場した三論学綱要書の中にはそのアイデンティティーが不明なものが少なくない。伝えられないものは論外にしても、吉蔵の著述と伝わる『大乘玄論』と、『三論略章』、『八科章』などはすべて吉蔵本人の著述ではなく、後代に編集されたものである可能性が高い。また、吉蔵の『三論玄義』と碩法師の『三論遊意』は、元々は『中論』について論じた本であったが、後代に『中論』ではなく、三論学全体の綱要書のように流通されたものである。伝えられないものの中でも、僧肇の『三論玄義』と法朗の『山門玄義』は、後代に三論学初期祖師の名前に仮託して撰述、或いは編集されたものである可能性が高い。

このように平安時代には奈良時代にはみられなかった新しい三論学綱要書が多く出現したのであるが、これらは既存の文献を真似て

新たに撰述されたか、既存の著述の名称を変えて新たに編集されたものがほとんどであった。それにもかかわらず、これらが広く流通されたのは、既存の文献とは異なり、当時の仏教界の要求事項をうまく反映したからであろう。

新たに流通された文献の中で『大乘玄論』と『三論略章』などは、既存に広く流通されていた『大乘四論玄義記』に比して扱う主題を制限することによって分量を大きく縮小したのである。『大乘四論玄義記』が二十三篇の主題を十二巻に収録していたのに対して、『大乘玄論』と『三論略章』は八篇の主題を各々五巻、或いは三巻に収めたのであり、『八科章』はさらにこれを一巻に抄略したのである。三論学の核心的主題だけを選び取って簡潔に整理したこれらの文献が既存の『大乘四論玄義記』に比べ活用するのに便利であつたらう。

一方、『三論玄義』と『三論遊意』などは、三論、すなわち『中論』『百論』『十二門論』及びこれらと緊密な関係にある『大智度論』の思想的要諦を説明する文献であると同時に、これらの論書のほかの経論に対する優越性を強調している。これは奈良時代に広く流通された元暁の『三論宗要』とは異なる性格であると考えられる。『三論宗要』自体が伝えられないため、その内容を知ることができないが、諸経論の思想的違いを会通する和諍を重視した元暁の思想的傾向からみると、この本がほかの経論に対する三論の優越性を強調したとは考え難い。奈良時代後期以降、日本仏教界は学派間の競争が激しくなつたのであり、この過程において宗派意識も強くなつたの

である。このような状況において三論学の優越性を強調する内容が盛り込まれた吉藏の『中論玄(義)』と碩法師の『中論遊意』が、各々『三論玄義』と『三論遊意』に名称を変えて、三論学の思想的特性と優越性を知らしめる文献として位置付けられるようになったものと考えられる。

一方、このように新たに登場した様々な文献の中でも、特に『大乘玄論』と『三論玄義』が最も広く流通されて、後代に最も權威のある文献として定着された背景には、これらが吉藏が撰述した綱要書として流布されたという事実も重要に作用したのであろう。三論学派の宗派意識が深化されるにつれて宗祖に対する尊崇意識も強化されたのであるが、この過程において宗祖である吉藏が撰述した『大乘玄論』と『三論玄義』が、傍系の祖師である慧均と元暁の『大乘四論玄義記』と『三論宗要』に取って代わるようになったのは自然の流れであつたといふことができる。^(註)

四 日本古代三論学に及ぼした百済仏教の影響

これまでみてきたように、日本古代仏教界において流通された三論学綱要書は時代によって違いがあつた。奈良時代には、百済で撰述された慧均の『大乘四論玄義記』と、新羅僧侶元暁の『三論宗要』(『三論玄義』)が主要な文献であつたのに反して、平安時代には、これらのほかに中国三論宗祖師たちの文献が多数流通されたのであ

り、その中でも吉蔵の『大乘玄論』と『三論玄義』が主要な綱要書として位置付けられるようになったのである。ところで、このような流れの中で注目されるのが『大乘四論玄義記』の位相である。この本は奈良時代の主要な三論学綱要書であったのみならず、平安時代に新たに出現した主要文献、特に吉蔵の著述と知られる『大乘玄論』『三論略章』『八科章』などのモデルになったのである。日本古代の主要な三論学綱要書は『大乘四論玄義記』とその変形文献であったということが出来る。

『大乘四論玄義記』をモデルにした変形文献のはじまりは、七六八年の資料にみられる三巻本『三論略章』であったものとみられる。先に見てみたように、この文献は慧均の著述と同様に、『大乘四論玄義記』という書名を持っていたのであるが、このことからみると、この本は慧均の著述をモデルにした似たような性格の文献であったと考えられる。この文献の出現からいくらか経たない時期に、再び似たような性格を持つ吉蔵の（著述と知られる）『大乘玄論』と『三論略章』などが出現したのである。これは当時の仏教界においてこのような文献に対する要求が幅広かったことを示すものである。このように似たような性格の文献が共に流通されていき、最終的には『大乘玄論』が代表的文献の地位をつかんで、ほかの文献は次第に消えるようになったのである。安澄の『中論疏記』において『大乘玄論』はほかの文献に比べ圧倒的に頻繁に引用されているが、これはすでに八世紀末頃に『大乘玄論』が三論学綱要書の代

表的位相を確保していたことを示すものである。『大乘玄論』がこのような短い間に代表的文献の位相をつかみ取ることができたのは、ほかの文献に比べより体系的でありながらも、三論宗の正統な祖師である吉蔵の思想に最もよく符合されたからであろう。既存の研究において明らかになったように『大乘玄論』には吉蔵のほかの著述に出てくるものと同一の文章が少なくないが、これはこの本の編纂者（たち）が吉蔵の著述を土台にしてこの本の内容を構成したことを示すものであると考えられる。

このように八世紀末以降、三論学綱要書の代表的文献という座に就いた『大乘玄論』は、それ以前に出現した『三論略章』と同様に、奈良時代の代表的三論学綱要書であった『大乘四論玄義記』をモデルにして撰述されたものであった。『大乘四論玄義記』に比べて主題と分量を削り、教迹義と論迹義などを追加したのであるが、基本的には三論学の主要概念に対して各々の独立された概説を著し、これらを一まとめにした『大乘四論玄義記』の構成形式を踏襲したものであった。このような点において『大乘玄論』は『大乘四論玄義記』の改良文献であるということが出来る。

このように日本の三論学（派）は、初期には『大乘四論玄義記』を土台にして形成されたのであり、以降、宗派として発展する段階には『大乘四論玄義記』を変形、改良する過程において独自の性格を整えていった。このような点において『大乘四論玄義記』は日本古代三論学（派）の基盤になった主要な文献であるということが

できる。そして『大乘四論玄義記』のこのような位相を考慮する時、既存の日本三論学（派）の形成過程を改めて検討する必要があると考えられる。

日本仏教界の伝統的理解によると、三論学の伝来と三論学派の形成は三次の過程を経てなされてきたとする。すなわち、中国で吉蔵に修学した後、六二〇年代に日本にやってきた高句麗僧侶慧灌〔観〕が、孝徳天皇二年（六四六）に元興寺ではじめて三論を講義したのであり、以降、彼の教えを継承した智蔵⁽⁹⁶⁾が、唐に渡り三論学を学んできたのであり、最後に智蔵の弟子である道慈が、再び中国に修学して、帰ってきては多くの門徒たちを養成することにより、三論学派が隆盛するようになったというのである。このように日本の三論学形成に対する伝統的理解においては、高句麗出身慧灌と七世紀後半の入唐留学僧たちの役割だけが強調されているばかりで、百済仏教の影響は注目されていないのである。七世紀前半、日本で活躍した慧聡、観勒などの百済出身僧侶たちについて、三論学の宗匠たちであったとは言及しながらも、日本三論学（派）⁽⁹⁷⁾形成に関連しては特別に重視されていないのである。

しかし『大乘四論玄義記』が現在確認される最も古い三論学綱要書として奈良時代の全般にわたり頻繁に筆写されているのであり、さらに平安時代までも持続的に影響を及ぼした事実を考慮する時、このような認識は歴史的事実を正しく反映したものとは言い難いのである。高句麗や中国よりも『大乘四論玄義記』が撰述された百済

の仏教がより大きな影響を及ぼしたとみるべきであろう。実際に古代の伝承において三論学の最初の伝来者と重視している高句麗出身慧灌の場合、『日本書紀』のような公式文書には全く言及されていないのであり、二回目の伝来者である智蔵もなお、当時の資料には現れていないのである。三回目の伝来者である道慈の場合も、当時の資料には三論学者としての様子はそれほどはっきりとはみられていないのである。彼らは実際に三論学を伝来、弘布した人物たちであるというよりは、後代に三論学の系譜を体系化する過程において召喚された人物たちである可能性が高い。智蔵は奈良時代の代表的三論学者である智光の師匠であったのであり、道慈の弟子もなお、奈良時代の有名な三論学者にして、その門下において平安時代初期の代表的三論学者である安澄を輩出した善議であった。智光と善議の系譜は、後代に各々日本三論学の二大系譜である元興寺三論宗と西大寺三論宗とに発展するが、智蔵と道慈は、これら二大系譜の始祖の師匠であったという点から、三論学の伝来者と尊崇されたのではないかと考えられる。一方、高句麗慧灌が最初の伝来者と語られたのは、三論宗の正統な祖師である吉蔵から直接教えを受けることができる時代の人物が必要であったからであろう。

日本仏教界は百済と緊密な関係を結んでいたのであるが、日本仏教界の正当性と正統性を付与する存在としては重視されていなかったのである。そのような側面においては、むしろ高句麗仏教が重視されたのである。聖徳太子の仏教に関連しては、共に元興寺におい

て活動した高句麗の慧慈と百済の慧聰のうち、慧慈だけが重視されているのであり、三論宗の受容に関連しても、同じような時期に活動した高句麗の慧灌と百済の観勒のうち、慧灌だけが重視されている。実際に七世紀中葉に三論学が日本に伝来されたのであれば、その伝来者は当時の資料に現れない、それほど有名ではなかった慧灌よりも、優れた学問僧にして、最初の僧正として当時の仏教界において多大な活躍をした観勒(8)がより適切であつたろう。それなのに、観勒よりも慧灌が重視されたのは、後代の日本社会における高句麗と百済に対する認識の違いからであつたと考えられる。自分たちの藩国として認識していた百済から水準の高い思想を受容したとするよりは、決して無視することのできない存在であつた高句麗から受け容れたとするのが、国家的自尊心に傷がつかないと思つていたのではないかと考えられるのである。

五 おわりに

これまで奈良時代と平安時代の仏教界において流通された三論学綱要書の性格とそれらの流通状況について探つてみた。その結果、既存の一般的理解とは違い、三論宗の基本文献として認められてきた吉蔵の『大乘玄論』と『三論玄義』などは、奈良時代にはみられないのであり、平安時代に入つてきてはじめて流通され出すようになったという事実を知るようになったのである。また二つの文献

は、吉蔵の本来の著述ではなく、後代に新たに撰述されたか、再編集された文献であるということも確認できるようになったのである。一方、『大乘玄論』と『三論玄義』などが重視される以前には、百済と新羅で撰述された『大乘四論玄義記』と『三論宗要』が重視されたのであり、特に『大乘四論玄義記』は『大乘玄論』のモデルにして、後代までも日本三論学に持統的な影響を及ぼしたのである。日本三論学において『大乘四論玄義記』がこのように重要な役割を担っていたということは、日本初期の三論学が百済仏教の影響下に形成されたことを示すものであるということが出来る。

後代の日本仏教界の伝承では、三論学が高句麗出身慧灌の紹介と彼に修学した僧侶たちの入唐求法活動を通して伝来、発展されたとするのであるが、これは当時日本仏教界の発展に最も重要な影響を及ぼした百済仏教の影響力を正しく反映できていない観念的歴史認識であると言わざるを得ない。奈良時代の古文書資料と『大乘玄論』などの後代文献にみられる『大乘四論玄義記』の流通状況及び影響力は、日本三論学に及ぼした百済仏教の影響力を再認識せしめる端緒になり得るであろう。

注

(1) 百済仏教が日本に及ぼした影響に対する概括的叙述としては、中井「二九八五」(中井「二九九四」に再収録)がある。

(2) 金東華「二九七一」*、田村「二九九四」参照。

- (3) 崔「二〇二」八一―八八頁。
- (4) 井上「二九四三」(井上「二九八二」に再収録)参照。
- (5) 金正基「二九八六*」、張「二九九三」、金東賢「二九九八」、金理那「二九九一*」(金理那「二〇〇三」に再収録)、文「二九九八」、李炳鎬「二〇二二」・「二〇二三」、趙「二〇〇二」、佐川「二〇一〇」参照。
- (6) 李萬「一九九四」(李萬「二〇〇〇」に再収録)、金天鶴「二〇〇八」参照。
- (7) 崔「二〇〇七」参照。
- (8) 『大日本古文書』(以下、『編年』第一冊―第五冊に収録される古文書を対象として検討したのである。ここには大宝二年(七〇二)から宝龜十年(七七九)までの古文書が収録されている。文献の検出には、石田「一九三〇」、木本「二九八九」、東京大学史料編纂所のホームページ(<http://www.vaphu.tokyo.ac.jp/ships/>)〔に公開されている〕奈良時代古文書フルテキストデータベースなどを参照したのである。
- (9) 元康の『三論疏』は後代の文献目録などを参考してみると、『中論疏』『百論疏』『十二門論疏』を総称したものとみられる。
- (10) 現在『大正』四五(七七―一五頁)に収録されている(No. 一八五四)。
- (11) 『編年』七二―二三頁。天平十二年に写経所で作成した経巻納櫃帳に含まれている。この経巻納櫃帳はある特定の場所に所蔵されていた仏典の目録とみられる。『編年』では、天平十年(七三八)と編次したのであるが、この文書の末尾に「天平」十二年三月十七日〔『編年』七二二頁〕の日付が記録されている。天平十年に写経した仏典の目録と把握したのではないかと考えられる。
- (12) 『編年』一六・四〇六頁、『編年』一七・七九頁、八四頁。
- (13) 現在伝えられている『大乘四論玄義記』と、『大乘玄論』、『三論略章』などにすべて「二諦義」が収録されている。
- (14) 義天の『新編諸宗教蔵総録』巻下にも、一巻本「二諦章」二種(一種は元暁撰述、一種は撰者未詳)が収録されているが(『韓国仏教全書』四・六九六頁〔『大正』五五・一七七頁〕)、この中の一つである可能性もある。
- (15) 崔「二〇〇七」一五一―二二頁。
- (16) 伊藤「一九七二a」一四三頁。
- (17) 『統蔵』第一輯*第七四套*に、二諦義、感応義、断伏義、金剛心義、仏性義、二智義、三乘義、莊嚴義、三位義などが収録されており、個人が所蔵する筆写本に、初章中仮義と八不義が収録されている。これら十一篇は、最近刊行された校勘本にすべて収録されている(崔「二〇〇九」参照)。夢覚義、十地義、五種菩提義、成壞義、開路義、十四音義、四悉檀義、三宝義、涅槃義、法身義、淨土義、般若義などは伝えられていないのである。
- (18) 伊藤「一九七四」参照。
- (19) 『編年』七・四九〇頁。
- (20) 『編年』二四二―二五一頁。「占云*均章「六百七十五張*」』という細注が付いている。

- (21) 『編年』八・五三五頁。「(均僧正撰) 三百一紙」という内容が追加されている。
- (22) 『編年』八・五八七頁。「大乘四論玄義記九卷」。
- (23) 『編年』二四・四〇二頁。「均章一帙十二卷 (亦名大乘四論)」。
- (24) 『編年』九・三八二頁。「大乘四論玄義記十二卷 (均正僧)」、三九〇頁。「大乘四論玄義記十二卷 (亦曰十二均章)」。
- (25) 『編年』一二・五二三頁。「大乘四論玄義記十二卷 (均僧正撰) 六百七十五張*」。
- (26) 『編年』一七・七八頁。「大乘四論玄義記十二卷 (均僧正撰) 一帙 籤二」。
- (27) 『編年』一七・一〇六頁。
- (28) 『編年』一七・一四一頁。
- (29) 義天は『三論宗要』の三論が「中(観)論」「百論」「十二門論」であることを具体的に述べている(『新編諸宗教感総*録』巻下「三論宗要」巻(中百門是) 元曉述)『韓国仏教全書』四・六九五頁(『大正五五・二七七頁])。
- (30) 『編年』一一・三〇四頁。
- (31) 『編年』一一・三六二頁。
- (32) 『編年』二五・一七六頁。「三論宗要」巻 用十六。
- (33) 『編年』一二・五四一頁。「三論宗要記」巻 十六紙。
- (34) 『編年』一六・四〇四頁。
- (35) 『編年』一六・四一七頁。

- (36) 『編年』一七・九九頁。
- (37) 『編年』一七・一〇八頁。「三論玄義」巻(元曉師 白紙 無軸帶)。
- (38) 『編年』一七・一〇六一―一〇頁。審詳の新羅華嚴学伝授の経緯及び彼が所持していた仏典目録などに関しては、堀池「一九七三」(堀池「一九八〇」に再収録) 参照。
- (39) 『編年』三・八七*頁。
- (40) 『編年』一一・四二九頁。
- (41) 『編年』一二・三三八二頁。
- (42) 石田「一九三〇」一二八頁、木本「一九八九」一三八頁。
- (43) 特に『三論玄義』のすぐ前後の文献は、三つの資料すべて『初章 観門』と『六十二見義』で正確に一致している。
- (44) 堀池「一九七三」に整理される「大安寺審詳師経録」(堀池「一九七三」四三三―四三三頁) 参照。
- (45) 『編年』二・五〇五頁、『編年』九・一九七頁。「長官宮三論玄義」巻 打紙廿張。
- (46) 写経作業における装演作業の内容と担当者及びそれに対する報酬などについては、栄原「二〇二二」二二六―二三〇頁参照。
- (47) 栄原「二〇二二」一一三頁。普通、筆写上の誤謬に備えるため、作業量の六%程度の余分を考慮したのであり、表紙は一紙で二巻分を作ったという。
- (48) 『編年』一七・一四一頁。
- (49) 『編年』一七・一三八頁。

- (50) 『編年』一七・一三一頁。
- (51) 『編年』一七・一二五―一二八頁。
- (52) 『編年』一七・一二二頁。三卷本の頭には「先」と書いてあるが、これは以前に造東大寺司からこの文献を受け取ったことを表示したものと考えられる。十一月二十五日に造東大寺司から奉写一切経司に送った文書に記録された文献にはすべて「先」が書かれている。
- (53) 石田「一九三〇」一二八頁には撰者未詳と、木本「一九八九」一三九頁には吉蔵の著述としている。
- (54) 落合「一九九八」三五九頁。
- (55) 『仏全』一・二四六頁。
- (56) 一〇九四年に撰述された『東域伝灯目録』には、淨秀の『三論略章』(三卷)と禪秀の『四論玄義』(卷数未詳)が掲載されているが、『仏全』一・六九頁『大正』五五・一二五九頁)、禪秀は淨秀の誤字と考えられる。
- (57) 大西「一九八四」一七一―一八頁参照。吉蔵の著述としては、『法華玄論』『法華経義疏』『法華経統略』などが引用されているが、『三論玄義』と『大乘玄論』は言及されていないのである。三論学綱要書の中心では、唯一『大乘四論玄義記』が二回引用されており、元暁も一回言及されている。
- (58) 大西「一九八四」二二頁では、七六九年の筆写本が伝えられている吉蔵の『浄名玄論』が奈良時代の古文書に全くみられないことを事例に挙げ、奈良時代仏教界の文献筆写と流通を理解する上での古文書資料の限界について述べている。
- (59) 落合「一九九八」三三九―三七七頁。
- (60) 『仏全』一・二〇四―二二頁、『大正』五五・一二三七―一三八頁。
- (61) 『仏全』一・二四五―二四六頁。
- (62) 『仏全』一・三五―八四頁、『大正』五五・二一四五―一六五頁。
- (63) 「又云均僧正十四卷又云無依無得大乘四論玄義記」(『仏全』一・三五頁、『大正』五五・一一五九頁)という細注が付いている。
- (64) 『大正』六五・一一二四八頁(No.二二五五)。
- (65) 法朗は吉蔵の師匠にして、三論学の理論を体系化したのであり、元康は唐の初期に活動した三論学者である。一方、碩法師は中国の資料にはみられないが、日本では吉蔵の弟子として知られてきたのである。
- (66) 『高僧伝』卷第六「釈僧肇」(『大正』五〇・三六五―三六六頁)。
- (67) 平井「一九七三」五四八頁では、法朗が『中論』或いは三論(『中論』『百論』『十二門論』)全体に対して論議した本である可能性があると述べている。
- (68) 『大正』四五・一一一五頁(No.一八五二)。
- (69) 平井「一九七三」五四八―五四九頁。
- (70) 平井「一九七三」五四九―五五〇頁。
- (71) 現在伝えられる吉蔵の『中観論疏』には、普通、経論の注釈書の冒頭にある玄義の部分が抜けているが、『中論玄(義)』はその玄義の部分を別途に独立させた別行本の可能性がある。
- (72) 『大正』四五・一五―七七頁(No.一八五三)。

(73) 村中「二九六六」参照。

(74) 三桐「二九七〇」、伊藤「二九七一b」、伊藤「二九七二」*参照。

(75) 平井「二九七六」三五六頁。

(76) 最近の吉藏の思想に対する研究においても『大乘玄論』を彼の思想理解の最も基本的資料と活用している。廖「一九八五」、高野「二〇一一」などが代表的である。

(77) 菅野「二〇〇八」、奥野「二〇〇九」参照。

(78) 安澄の『中論疏記』は『大乘玄論』を主に引用しながらも、八不義を引用する場合には『大乘玄論』ではなく、『均正』十二卷章「第二」の内容を以て引用している。ところで、『均正』十二卷章「第二」の表現は『大乘四論玄義記』中の八不義を引用する場合に限って使用される表現であって、ほかの篇を引用する場合には『均正玄義』という名称を使用している。

(79) 『統藏』第一輯*第二編*第二套第三冊五七五―五九二頁。

(80) 安澄『中論疏記』巻第五末「疏主釋云。二河者。凡有五種相對。一者緣河對佛性。此是二用相對。二者生死河對涅槃。此是得失兩果相對。三者衆生河對佛。此是得失兩人相對。四者善法河對惡法。此明乘扶兩法相對。五者煩惱河對智慧。此就迷悟解惑相對。而釋迦教中。具有河之與海。多借河名。舍那教中。具有河海。多借海喻。此同取其深廣無邊流注不沈淨等義。若是師子吼品明。生死河中有七種人。欲度生竭。即生死河也。迦葉品中明。七種人求涅槃。即涅槃河。又云。衆生壽命。入如來壽海中。即衆生佛河。又云。雖有龜魚。並不離於河。大論云。

舍利弗不能度布施即河善法。又云。如來海。衆生海。智慧海。即善法惡法等也。問。何故師子吼品是生死河。迦葉品是涅槃河耶。答。師子吼品明。七種人同欲度生死。有度不度者。欲斷煩惱。有斷者。故是生死河。迦葉品明。七人同欲求涅槃。有得不得者。欲見佛。有見不見者。故是涅槃河也。唯總而論即有二河。一生死。二涅槃河。今一往難了故。成五對十河也。准此。於是舉十河之中。初緣性河。具如三論略章二河義也（『大正』六五・五五頁）。

(81) 『三論略章』「二河義」「二河者。凡有五種相對。一者緣河對佛性。二者生死河對涅槃。三者衆生河對佛性河。四者善法河對惡法河。五者煩惱河智慧河。問此五種二河並出何處。答經教不同。釋迦教其中。具有河之與海。多借河名。舍那教中。具有河之與海。多借海喻。此因取其深廣無邊流注不沈淨等義。若是師子吼品。明生死河中。有七種人。欲度生竭死。即生死河也。迦葉品中。有七種人求涅槃。即涅槃河。又云。衆生壽命入如來壽海中。即衆生佛河。佛陀海佛也。又云。雖有龜魚。並不離於河。大智論云。舍利弗不能度布施。即河善法。又云。如來海。衆生海。佛智慧海。即善法惡法等河也。問師子吼明七種衆生。迦葉品明河中七人。云何判一是生死二是涅槃耶。答師子吼明七種人。同欲度生死。有度有不度者。欲斷煩惱。有斷有不斷者。故是生死河。迦葉品明七人。同欲求涅槃。有得有不得。同欲見佛。有見有不見者。故是涅槃河也。問此中河義爲同異。答總而論。唯有二河。一生死河。二涅槃河。今一往難了之。故或十也」（『統藏』第一輯*第二編*第二套第三冊五八四頁）。

- (82) 平井「一九七六」三九三―三九五頁。
- (83) 珍海『三論名教抄』卷第一「二諦義。於大乘玄論初卷以十門明之。又別有三卷章。亦開十門。：略章一卷義有八科。初明二諦義而無重數」【大正】七〇・六九三頁。
- (84) 珍海『三論玄疏文義要』第三「略章二諦義云。若是大品所明。有爲俗諦。空爲眞諦。若涅槃所明。空爲俗諦。有爲眞諦等(文) 古録中云八科章者是歟可尋之。且云非嘉祥作」【大正】七〇・二四〇頁。
- (85) 現在の『三論略章』は、二諦義、一智義、般若義、眞心義、涅槃義、仏性義、二河義、二種次第義、正像義、金剛三昧義、生法二空義、涅槃義(重複)、眞心一身義、常無常二鳥義、半滿義、仏性義(重複)などの十六個の篇で構成されており、八科に分かれてはいないのである。これについて平井俊榮は本来各篇に付属されていた小項目が後代に独立され今のような形態になったと説明している(平井「一九七六」三九五―三九六頁)。
- (86) 平井「一九七六」四〇〇―四〇二頁。すでに珍海もこの本が吉藏のほかの著述とは違いがあると認識していたのである(珍海『三論名教抄』巻第一「舊目錄言。八科章一卷。嘉祥撰。今見此大初立義目與內文有違。學者考之」【大正】七〇・六九三頁)。
- (87) 『宋・高僧伝』巻第四「唐京師安国寺元康伝」【大正】五〇・七二七頁) 参照。
- (88) 『編年』一一・二五頁。
- (89) 『編年』七・四九〇頁。
- (90) 『大正』四五・二六一―二〇〇頁(No. 一八五九)。
- (91) 安澄『中論疏記』巻第一之本「述義云。高麗國遼東城大朗法師。遠去燉煌郡曇慶師所。受學三論。齊未梁始。來入攝嶺山也。大朗法師得業弟子。陳攝山止觀寺僧詮師。如此次第得業弟子。興皇寺法朗師。法朗師得業。弟子。延興寺吉藏師。吉藏師得業弟子。碩受遠等」【大正】六五・二二頁)。
- (92) 『大正』四五・二六一―二二二頁(No. 一八五五)。
- (93) 平井「一九六五」一五六頁でも、碩法師の『遊意』を『中論遊意』とみている。
- (94) 同じような時期に法相宗と華嚴宗でも、従来重視された新羅出身の円測と元暉の著述に対する関心が弱化され、各宗派の正統な祖師と尊崇された中国僧侶窺基と法藏の文献が主に流通されるようになったのである(橋川「二〇〇二」、崔「二〇〇三」参照)。
- (95) 村中「一九六六」、奥野「二〇〇九」参照。
- (96) 智藏は慧灌に三論学を修学した福亮が出家する前に儲けた息子で、父親である福亮に三論学を修学したという(師鍊「元亨釈書」巻第一「釈智藏」【仏全】一〇一・一四三頁)。彼の中国留学時期は伝えられていないのである。
- (97) 凝然『三國仏法伝通縁起』巻中「三論宗」【仏全】一〇一・一一〇―一一一頁)。ほかの日本の高僧伝類にも同じように叙述されている。
- (98) 凝然『三國仏法伝通縁起』巻中「成実宗」【仏全】一〇一・一一〇頁)。
- (99) 『日本書紀』巻第二二「推古天皇」十年十月、三十二年四月参照。

〈参考文献〉

(日本語)

石田茂作「付録 奈良朝現在一切経疏目録」「写経より見たる*奈良朝仏教の研究」東洋文庫、一九三〇

伊藤隆寿「大乘四論玄義」の構成と基本的立場」駒澤大学仏教学部論集」

第二号、一九七一 a

伊藤隆寿「大乘玄論」八不義の真偽問題」『印度学仏教学研究』第一九卷

第二号、一九七一 b

伊藤隆寿「大乘玄論」八不義の真偽問題(二)」「駒澤大学仏教学部論集」

第三号、一九七二*

伊藤隆寿「大乘四論玄義」逸文の整理」『駒澤大学仏教学部論集』第五号、

一九七四

井上光貞「王仁の後裔氏族と其の仏教」『史学雑誌』第五四編第九号、

一九四三

井上光貞「日本古代思想史の研究」岩波書店、一九八二

大西久義「浄名玄論略述」の引用文献」『駒澤大学大学院仏教学研究学会年

報』第一七号、一九八四

奥野光賢「大乘玄論」に関する諸問題——「一乗義」を中心として——」

『仏教学レビュー』第五輯、二〇〇九

落合俊典編「中国・日本經典章疏目録」(七寺古逸經典研究叢書)第六卷、

大東出版社、一九九八

菅野博史「大乘四論玄義記」の基礎的研究」『印度学仏教学研究』第五七

卷第一号、二〇〇八

橘川智昭「日本飛鳥・奈良時代における法相宗の特質について——新羅唯

識学との関わりを探って——」『仏教学研究(仏教学研究会)』第五卷*、

二〇〇二

金天鶴「百済道蔵の『成実論疏』の逸文について」『仏教学レビュー』第四

輯、二〇〇八

木本好信編「奈良朝典籍所載仏書解説索引」国書刊行会、一九八九

佐川正敏「王興寺と飛鳥寺の伽藍配置——木塔心礎設置*・舍利奉安形式の

系譜——」『古代東アジアの仏教と王権——王興寺から飛鳥寺へ——』勉

誠出版、二〇一〇

高野淳一「中国中観思想論——吉蔵における「空」——」大蔵出版、

二〇一一

東京帝国大学文科大学史料編纂掛編「大日本古文书——編年文書——」第

一冊—第二五冊、東京帝国大学、一九〇一—一九四〇

中井真孝「百済仏教と日本古代の文化」『鷹陵』第一〇八号*、一九八五

中井真孝「朝鮮と日本の古代仏教」東方出版、一九九四

平井俊栄「三論教学成立史上の諸問題——南斉・智琳「中論疏」について

——」『駒澤大学仏教学部研究紀要』第三三号、一九六五

平井俊栄「中論疏引用の中論注釈書」『印度学仏教学研究』第二二卷第二

号、一九七三

平井俊栄「中国般若思想史研究——吉蔵と三論学派——」春秋社、

一九七六

- 堀池春峰「華嚴経講説よりみた良弁と審詳」『南都仏教』第三一号、一九七三
- 堀池春峰「南都仏教史の研究」上・東大寺篇、法蔵館、一九八〇
- 三桐慈海「慧均撰四論玄義八不義について(二)——大乘玄論八不義との比較対照——」『仏教学セミナー』第二二号、一九七〇
- 村中祐生「大乘玄論に*ついて」『印度学仏教学研究』第一四卷第二号、一九六六
- (外国語)
- 張慶浩「百済と日本の古代寺刹建築」『百済史の比較研究』忠南大学校百済研究所、一九九三
- 崔鉉植「日本古代華嚴と新羅仏教——奈良・平安時代華嚴学文献に反映された新羅仏教学——」『韓国思想史学』第二二輯、二〇〇三
- 崔鉉植「百済撰述文献としての『大乘四論玄義記』」『韓国史研究』第一三六号、二〇〇七
- 崔鉉植校注『校勘 大乘四論玄義記』仏光出版社、二〇〇九
- 崔鉉植「六世紀東アジア地域の仏教拡散過程に対する再検討——百済の仏教治国策と周辺国家に及ぼした影響を中心として——」『忠清学と忠清文化』第一三卷、二〇一一
- 趙源昌「百済二層基壇築造術の日本飛鳥寺伝播」『百済研究』第三五輯、二〇〇一
- 李炳鎬「百済定林寺式伽藍配置の展開と日本の初期寺院」『百済研究』第五四輯、二〇一一
- 李炳鎬「華嚴経講説よりみた良弁と審詳」『南都仏教』第三一号、一九七三
- 李炳鎬「百済寺院と日本飛鳥寺三金堂の源流」『百済研究』第五七輯、二〇一三
- 李萬「百済義栄の唯識思想——一仏乘説を中心として——」『韓国仏教学』第一九号、一九九四
- 李萬「韓国唯識思想史」蔵経閣、二〇〇〇
- 廖明活「嘉祥吉蔵学説」台湾学生書局、一九八五
- 金東華「百済仏教の日本伝授」『百済研究』第二輯、一九七一*
- 金東賢「百済建築の対日交渉」『百済美術と対外交渉』芸耕、一九九八
- 金正基「伽藍配置の比較」『古代韓・日関係史(『韓国史論』第一六冊)、国史編纂委員会、一九八六*
- 金理那「百済彫刻と日本彫刻」『百済の彫刻と美術』公州大学校博物館、一九九一*
- 金理那「韓国古代仏教彫刻比較研究」文芸出版社、二〇〇三
- 文明大「百済仏像彫刻の対日交渉」『百済美術と対外交渉』芸耕、一九九八
- 荣原永遠男(李炳鎬訳)『正倉院文書入門』太学社、二〇一二
- 田村圓澄「百済仏教の日本伝播」『百済の宗教と思想』忠清南道、一九九四

(この論文は、二〇一一年度の韓国政府(教育科学技術部)の財源によるもので、韓国研究財団の支援を受けて研究されたものである(NRF-2011-32A-G00009))

〈キーワード〉

大乘四論玄義記、三論宗要、大乘玄論、三論玄義、慧均、元暉、吉藏、百濟仏教、三論学

〈付記〉

平成二十九年年度身延山大学仏教学部開設授業科目の中で、訳者が受け持っている日本語科目「文法Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」では、学修課題の一つとして韓国語論文の日本語翻訳を行なうことにした。訳者はその対象とするべき論文を受講者に直接決めてもらうべく、韓国仏教が日本仏教に与えた影響について論ずる論文数本を受講者に提示した。その中から選ばれたのがこの論文である。この論文の韓国語原文は、公州大学校百済文化研究所 (<http://paekche.kongju.ac.kr/>) の学会誌『百済文化』第四九輯(二〇一三年八月発行)に収録されている。論文を翻訳し掲載することを快く了承していただいた著者・崔鉉植先生(東国大学校文科大学史学科教授)に深く感謝申し上げたい。なお、翻訳にあたっては、受講者・李ダソム(要約、一、二)、權辰月(三・注・参考文献の一部)氏(金剛大学校仏教文化学部応用仏教学専攻三年生)の補助を受けた。記して感謝申し上げたい。※文中の〔亀甲括弧〕は訳者の補い。典故などの確認により原文を訂正して訳したところには星印*を付した。

日本語訳・金炳坤(身延山大学准教授・博士(文学))